



教職大学院 Newsletter No. 73

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008. 4 2015.5.16

国立大学と附属校園のミッション再考

奈良女子大学文学部 教授 西村 拓生

奈良女子大学は教師教育改革コラボレーションに参加させていただいています。私たちの参加の仕方は、おそらく少し独特な、しかしとても切実なものです。直接のきっかけは国立大学の改革推進事業でしたが、本学の主体的な動機はもっと遡ります。平成13年に文部科学省の「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会」から、奈良女子大学のような非教員養成系大学の附属学校は原則として廃止する、という方針が出されました。本学の附属は大正自由教育以来の伝統を今日まで保持している、いわば無形文化財のような学校です。それをむざむざ潰すわけにはいかない、と考えた私たちは、「大学全体として附属学校を必要とする」というのが例外的に存続を認める条件でした——担保として、当時は文学部附属だった幼稚園、小学校、中等教育学校を全学附属に改組しつつ、「附属を活用して教育研究を遂行する」研究センターを立ち上げました。幸い附属は存続しましたが、それ以来、教員養成や教育研究にとっての附属校園の存在意義（近年の文科省用語で言えば、ミッション）を、あらためてどこに見出すべきかは、私たちにとって大きな課題であり続けています。

かつての通念は、附属は教育実習の場であり、また先進的な実践のモデルを提起する実験学校である、というものだったと思います。前者に関しては、本学は一般大学ではありますが、かつて女

子高等師範学校であった伝統の故か、今でも全体の4～5割の学生が教職課程を履修し、その大半が本学附属で教育実習を行なっています。後者に関しては、たとえば中等教育学校は早くから中高一貫教育に取り組み、国立大学附属として初の中等教育学校の一つになりました。スーパー・サイエンス・ハイスクールにも3期続けて指定されています。小学校は大正自由教育時代から子どもたちが自発的に取り組む合科学習の伝統を維持し続け、「総合的な学習の時間」導入時には全国的なモデルになりました。かつては、それで充分、と思われていました。

しかし、どうもそれではもはや足りないのです。「在り方懇」に指摘されたからではなく、現在の学校教育や教員養成の状況を私たちが自ら見渡した時、従来とは異なった附属校園のミッションが

内容

- 国立大学と附属校園のミッション再考 (1)
- スタッフ紹介 (3)
- 院生紹介 (7)
- インターンシップ／
週間カンファレンス報告 (13)
- 4月合同カンファレンスに参加して (15)
- 平成27年度教員免許状更新講習について (24)
- 附属中学校教育研究集会 (25)
- 研究紀要・実践報告書の紹介 (26)
- Schedule (28)

あるように思われるのです。今日の学校の状況では、教育実習をして教員免許を取って就職しても、直ちに「教師になれる」わけではありません。実践の中で、様々な子どもたちの姿に即して、同僚と共に自己省察を重ねながら、常に「教師になりつつある」過程を生きることが、現在の教師には求められています。それは本学附属でも同様です。そしてSSHやら「奈良の学習法」やら、いわゆる「先進的な実践」なるものも、それを担う教師の存在と切り離し得ない以上、「これがモデルでございます」とパッケージ化して差し出せるものなど表層的なものに過ぎないのではないか。——そんな疑問をいただいていた。

そこで視野に入ってきたのが福井大学の教職大学院の試みでした。それは、学校現場の実践から離れた所で一方的に教え・学ぶのではなく、現場で教師が「教師になりつつある」過程に丁寧に寄り添い、共に実践を語り、実践から学ぶ場を育てる試みである、と理解しました。今、求められているのはまさにこれではないか、と思いました。ですから、コラボレーションへの参加を呼びかけていただいたのは渡りに舟だったのです。当初の構想における奈良女子大学の位置づけは研究者養成大学としてのそれでしたが、現在ではそれ以上にむしろ、それが本学と附属校園のミッションの再構築の契機となることに、私たちは大きな意義を見出しています。幸か不幸か、本学の附属は今、大幅な世代交代の時期に直面して、かつてのようにベテラン教師が名人芸めいた実践を披露して範を垂れる、といった在り方が成り立たなくなっています。次々に入ってくる若手の教師が、それぞれの附属の「教師になりつつある」過程を今まさに生きています。それを私たちはむしろ好機と捉えています。中等教育学校では若手・中堅の教師たちがこぞって福井ラウンドテーブルに参加させていただき、公開研究会でもラウンドテーブル方式を取り入れています。今年度からは拠点校として2名の教師が教職大学院にお世話になっています。小学校では、一昨年度から本学の大学院生が

福井大学のコーディネーターチャーとして、若手教員の授業研究に伴走しています。

奈良女子大学のような大学の附属校園に存在意義があるとしたら、「研究開発学校」スタイルで「先進的な実践モデル」を提起することだけでなく、教師が共に「教師になりつつある」場を自覚的に構築し、そのプロセスを成功も失敗も含めて公開・共有することを通じて他の実践の場での省察の手がかりを提供すること、そこにもう一つのミッションがあるのではないか、と思うのです。そしてその中で、一方的に理論からでも一方的に実務からでもない、真に実践に根ざした教育研究者が育つことがあれば、と念じています。

スタッフ 紹介



綾城 初穂 あやしろ はつほ

3月1日付けで教職大学院の特命助教として着任いたしました綾城初穂と申します。専門は臨床心理学で、

現在は、ディスコース分析という研究法を用いて、特に子どもとのカウンセリング過程を検討しています。これまでは、博士課程の院生として大学院での研究やいくつかの大学の非常勤講師をしながら、5年ほど臨床心理士として子どもたちやその保護者のカウンセリングに携わっていました。カウンセリングの発想は、教育と近いようで実は割と遠いところもあるため、教職大学院に来てから相当なギャップも感じておりますが、教員・学生・スタッフの皆様や福井の人たちの温かさで何とか心理的健康を保つことができております。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

苗字も名前も珍しい上に、字面から女性と思われることも多いので、自己紹介で苦労することがよくあります。そうした苦手意識のせいか、ここまで書くのにも相当な時間がかかっています。確認してみたところ、与えられた字数までまだあと1500字ほど足りないということが分かりましたので、残りは私のこれまでの歩みなどでごまかさせていただければと思います。

私は、東京都生まれの神奈川県育ちです。中学の時に引っ越しをしてから20年近く神奈川県に住んでおりましたので、「神奈川県出身」と言ってもいいのですが、神奈川県に対する愛着が芽生えないまま今に至ってしまったので、こういうまどろっこしい言い方が私には一番フィットします。神奈川県に愛着を持たない理由を書き始めると今度は1500字で足りなくなってくるのですが、中学校があまり好きではなかったというのが一番大きい気がしています。ただ、よくよく考えてみると、小学校もそれほど好きではなかったもので、中学校が原因というわけではないかもしれません。

小・中学校はあまり好きではなかったのですが、高校は好きでした。欠席や遅刻をしても、大きく咎められませんでしたし、そればかりか、いつ行っても迎え入れてくれるような雰囲気さえありました。私にとってこれはとても新鮮で、パラダイムシフトに近い体験でした。自分で自分の時間を調整することが許されているような、一種の自由を与えられた感じがしたからです（先生方がどう思ってたっしやったかはわかりません）。

こう振り返ってみると、私が小・中学校を嫌いだったのは、私にとって学校が自分を徹底的に「管理」される場所だったからではないかと思います。小学校も中学校もごく普通の公立学校でしたし、理不尽な扱いや不適切な指導を受けたという記憶もあまりありません。それでも、まるで心も体も学校という組織に常に管理されているような窮屈さを感じ、早く抜け出したいという思いをいつも持っていました。おそらく私は、学校のあり方を深く内面化し、守るべき規律に従うよう自分で自分を強く縛っているにもかかわらず、そのことに気付かず苦しんでいたのだと思います。小学生の頃、外回りをしているサラリーマンを教室の窓越しに見ながら、「大人は会社の時間でも外に出ていいんだ。羨ましい」と感じた時のことを今でもよく思い出します。校則に拘束されていたというダジャレも今浮かびましたので、とりあえずついでに書いておきます。

そういった感じでしたので、私にとって大学（と大学院）は高校以上に自由を感じられる場所でした。授業と全く関係のない勉強を自分の関心の赴くままに一人で進めるようになったのも、ちょうど大学に入った頃からです。こうした主体的な学びを私に可能にさせたのは、格好良く言うと、管理と規律に縛られた学習からの解放だったと、そんな感じがしています。裏を返せば、少なくとも私にとっては、内面化された規

律による管理は、ついに主体的な学びをもたらすことはなかったということです。

こうした“管理”や“内面化された規律”といったテーマは、臨床心理士としての私の問題意識とも深く結びついています。勤務していた相談室の性質もあり、私がこれまで接してきたクライアントの多くは、学校に馴染めない子どもたちでした。彼らのほとんどは、学校を責めるというより、学校に馴染めない自分を責めたり、学校に馴染めないことを恥ずかしいこととして隠そうとしたりしていました。つまり子どもたちの多くは、“自分が馴染めない学校”ではなく、“学校に馴染めない自分”を問題と感じていたということです。これは、彼らが自らの中に「学校に馴染むべき」といった内面化された規律を持ち、それと照らしあわせて自分を否定的に評価しているということを意味しています。確かに、子どもたちがカウンセリングを必要としなくなることで学校に馴染めるようになっていくことは並行することも多いため、学校に馴染め

るように子どもたちを援助することはよくあります。しかし一方で、そうしたことを推し進めるカウンセリングは、結局のところ、「学校に馴染めない自分が問題だ」という子どもたちの思いを助長し、彼らを苦しめている内面化された規律をより強固なものにするだけなのではないかと感じるものが度々あったのも事実です。

カウンセリングでのこうしたジレンマをどのように扱っていけばいいのか、私はいまだに答えを見つけていません。しかし、その糸口はもしかすると（私が大学で体験したように）主体的で省察的な学びを促進する教育実践の中にあるのかもしれないと、密かに期待しています。教職大学院のスタッフとしてそうした実践との関わりを持たせて頂くことは、大変光栄です。皆さまとの交わりの中で心理援助の新たな可能性を見出していければ、こんなに嬉しいことはありません。結局 300 字ほど字数オーバーしてしまいました。これからどうぞよろしくお願いいたします。



稲井 智義

2015 年 3 月、本教職大学院に特命助教として着任した稲井智義です。専門は教育学。教育学の中でも教育思想史を専攻しています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

私は大学生時代に紆余曲折があり、幼児教育に関わる問題を通じて教育について根本的な観点から捉え直してみたいと思うようになりました。たとえば「幼児や子どもとはどのような存在か」、「幼少期の子どもに対して必要な教育とはどのようなものか」、「自分自身の幼児期の経験にはどのような意味があるか」という疑問を抱きました。そして大学三年生であった 2007 年度に、フィールドワークを課題とする演習（ゼミ）に参加していたこともあり近所の公立保育園にボランティアとして関わりと同時に、もう一つ「およそ

いない ともよし

子どもと教育に関わることであれば何でも思想的・歴史的に検討する」ことをねらいとした演習にも参加しました。こうした影響もあって就学前教育だけでなく、子ども時代の中でも前半に位置する幼少期の子ども問題を通して教育について考えていくようになり、今に至っています。

このような大学生時代を経て 2009 年度に大学院に進学する中で、幼児教育だけを見ていても幼児教育に対する理解は深まらないということに、多くの先生方からのアドバイスもあって気づきました。その周辺にも目を配る必要があるということです。そのためこれまでの研究では、親のいない子どもや貧困層の子どもがどのように教育を受けて、またそれがどのような養育や大人からの支援があって可能になったかについて、近代日本で孤児院や保育所が作られていく過程を事例としながら論文を書き進めてきました。これらの

成果についてはできるだけ早いうちに博士学位論文にまとめたいと、目下悩んでいるところです。

私は上記の研究をする際に、「思想史」という観点を採用しています。教育思想史研究とは、教育実践を支えている思想に注目して、その思想がいつどこでどのように形作られて、そして今の時代と社会に関わっているか（いないか）について明らかにする研究ということができます。このように思想史という観点から、目の前の教育を少し別の角度からも眺めることで、新しく見えてくることもあり、それが間接的にはいえ今の世の中に役に立つと信じて研究をしています。

実演してみましょう。身近なところでは、福井大学教職大学院を思想史的な観点から見つめ直すこともできます。たとえば本ニュースレターには「スタッフの自己紹介」が第1号から掲載されていて、私は実際に「（おそらく）すべての自己紹介」をこの4月に読みました（この原稿をどのように書こうか模索した結果であり、歴史家の習性です）。そこでは経歴・研究の紹介にとどまらず、今の教育現実に対する思い（思想）が、福井大学（たとえば着任した年）や教育実践との関わりはそれぞれ違うにしても、本教職大学院に関わって間もない地点から率直に語られていたように感じられました。過去のニュースレターを読み続けるという作業はちょっと大変でしたが、思いがけない雑多なことが目に入ってわくわくしたことも事実です（機会があればその成果はどこかで発揮されるはず

です）。要するにそれぞれの読者や書き手の関心から定点観測をすることで、思想史（歴史）という視点を誰もが獲得することができ、また思想や歴史は決して遠くにあるものではないということです。そのことが、本稿をお読みの方々に少しでも伝われば幸いです。

さて私の研究の紹介とともに、私の癖を披露した文章になりましたが、以上のように私は教育の現場にも顔を出してきた一方で、数百年からはたまた数千年という時間軸で教育を捉え直して、現実から距離をとることもありました。しかし今回の着任に伴って、社会の現実や教育実践との折り合いをつけていくべき時が来たように感じています。着任から本稿執筆時期までの間にもすでに模索してきたように、今と将来の教師たちが悩んでいたりと、実践から少し距離をとって教育についてゆっくりと考えたりすることを、一人の研究者として同伴する。それと同時に、その中で周りの方々や私自身が上手く言葉にできずにもどかしかった経験も大切にしながら、それぞれの悩みや私が大学生時代に抱いた疑問に対してももう少し明確な答えを出していく。その積み重ねの中で私なりに研究と教育現実とを結びつけ、子どもたちと大人たちが生きているこの世界を少しでもよいものとするために、思想や言葉を磨いて、社会に対する認識を深め、教育に関わる人々と協同できることを願っています。改めまして、今後ともどうぞよろしくお願いします。



加藤 正弘

平成26年度に引き続き、今年度も非常勤講師（コーディネーターチャー）を担うことになりました。私はこれまでに教諭18年（小学校3年、中学校15年）、行政8年、管理職10年の36年間にわたり、学校教育一筋に勤しんできました。これまでの職務で思い出

かとう まさひろ

に残ることを三つあげ、自己紹介に代えたいと思います。

一つ目は新卒で赴任した3年間の弥美小学校時代にあったことです。初めて小学生と接しました。授業がうまくできるはずがありません。「よく教師になったね」と指導主事に言われ、何でも言ってくる保護者にも困り、教師を辞めたくなくなっていました。2年間を終え、校長にもう担任はしたくないと直訴したところ、

それならと音楽専科を命ぜられました。音楽教育など全くわかりません。楽譜も読めないのに三方郡の秋の音楽発表会にどうやって臨めばよいのか…。自分の音感には少しばかり自信があったので、楽譜を自分で書けば音のイメージができていし指導ができるかも知れないと考え、14パートに分けた楽譜を書きました。ピアノで音を取り、徹夜して2週間かかりました。楽譜は読めなくても楽譜は書けるのです。同僚の助けも得て学年児童60名で奏でるリズムの効いた吹奏楽風の演奏となり、やりたい音楽を自分で創る喜びを味わいました。はじめて指導主事から誉められました。あきらめずに出来ることからがむしゃらにやっていると、結果が出ることもあるのだと知りました。教師をやめなくてよかったと、思ったものです。

二つ目は福井大附属中での実践です。それまでの附属中は授業者側に立った授業分析研究が中心でした。それを、学習者の立場に立った学習モデルを構築した研究に転換する実践を始めました。さらに、現在の「学年プロジェクト」の礎となる総合学習を学年ごとに繰り上げていく実践を強力にすすめました。論文に応募して賞金や助成金を得て次の実践につぎ込み、そして新たな論文を書いてまた応募するというサイクルが実践推進のエンジンでした。3年間しか在籍しませんが、思い出多い、充実した日々でした。しかしながら、ちょうど大学が独立行政法人化される前で、大学の先生方とは従前通り一定の距離があり、学校全体の研究の論理構成や価値付けに、はがゆい思いをしていたのを覚えています。その後、附属学校は実践研究校として大学と一体化し、飛躍的な成長をとげて現在に至っている様子を見ると、大学の力とは偉大なものだと感じています。

三つ目は、生徒指導上の深刻な問題が多発し、保護者からの信頼も失っていた藤島中学校に校長として

赴任し、毎日頭を抱える日々が始まった中で行った実践です。このときの学校経営の手法は、カンファレンス機能を学校経営の中に埋め込むことでした。管理職について以来、10回ほど参加してきたラウンドテーブルが丁度よい節目を刻んでおり、それへの参加が問題解決を目指す学校経営に磨きをかけていったように思います。参加したラウンドテーブルのうち、実践を語り聞きあう最終日の実践報告は、6回行いました。さすがにレポートをつくる時間はないので、パソコンでプレゼンしたり、模造紙を黒板にしたりしての報告となりましたが、自分の実践の文脈を語る過程の中で新たな価値に気づくとともに、語るという行為そのものが次の一手の創造につながるのを知り、ラウンドテーブルに参加することの意義を実感したものです。

「校長とは孤独に耐えることなり」などと先輩から聞いたことがあります。それは学校の責任者として校長にしか担うことのできない重責を指しているものです。しかし、リーダーシップをとって職員とともに新しい価値を創造することの楽しさは、これまた校長だからできることなのです。学校経営の目標は職員の問題解決能力を高めることと教育活動において最大の効果を得ることにある、とは本当だと思いました。職員とともに協働探究・実践を徹底して展開し、学校は見事によみがえりました。管理職だった10年間の職務ステージは厳しい環境にあったため、新しい知を生成して実践、省察し、次の知を創出するという繰り返しの日々となりましたが、「仕事とは面白いものだ」と知った10年間でもありました。

以上、いずれも自分がおかれた環境と、同僚との協働が自分を鍛えてくれたような気がします。

この先、教職大学院でどのような仕事ができるのかわかりませんが、枯れた味わいを醸し出しつつ、少しでもお役に立てれば幸いです。

院生 紹介



黒瀬 卓秀 くろせ たかひで （カリタス女子中学高等学校）

生徒に頭を使わせる授業をもっとしなければとちょうど思っていたところに、教職大学院に行ってみようか、という話を頂いた。アクティブラーニングを勤務校

に広めることが私のこれから 2 年間のミッションとなった。

物理の教員として民間の研究団体やサークルに参加し、実践報告をしたり他校の仲間の授業を見に行ったり、時には研究会の仲間に授業を見に来てもらったこともある。生徒に頭を使わせる授業を作るのは大変だが、そういう授業をしたときは生徒の頭のスイッチがオンになっているのがわかるし、私自身の生徒理解が深まってくれ、楽しい。では、いつもそんな授業をしているかといえば、残念ながら違う。忙しいことや範囲を終わらせなければいけないことを口実に従来型の授業をすることの方がずっと多い。自分の授業を改善し、同僚へ公開していくこと、まずはここから始めたい。

思い返せば、自分が中学受験をして入った「いい学校」の授業が、普通の授業であったことに「なんだあ……。」と思ったことが、自分の授業研究の出発点かも知れない。あのとき、自分が期待していた「いい授業」ってどんなものだったのだろう。

大学進学時、文系学部へ進学する可能性も考えた。そして、理工学部のキャンパスで受けられる唯一の文系授業だからと教職課程を取った。実はわたしは理系の人間なのではなく、理系と文系の間の人間だったのだろう。そもそも理系文系なんていう分け方に、意味はない。もっと言うなら、自然や社会があるのであって、細分化された教科・科目が最初にあるのではない。それを生徒も教師も忘れてしまっているのではないか。

この 2 年間は、新しいことにチャレンジすると同時に、これまでやってきたことを振り返る 2 年間になりそうだ。ここで出会った仲間とともに、そして同僚とともに、忙しくても有意義な 2 年間にしたい。次へと繋げられる 2 年間にしたい。



荒木 直則

今年度、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました荒木直則です。現在、福井県教育研究

所教育相談部に勤務しています。一昨年までは、福井県立小浜水産高等学校で、水産の専門教科の教員として 24 年間勤務いたしました。水産高校では、教育相談の担当を 9 年間行い、たくさんの生徒の問題と向き合ってきました。その中では、解決に導けたケースやできな

あらき なおのり （福井県教育研究所）

ったケースを多く体験してきました。教員として生徒、保護者との関わりにも限界があり、幾度となく悔しい思いも経験してきました。こうした中、昨年度教育研究所の相談部に配属になり、今までにはない経験をすることができました。相談の数の多さに驚かされたのが第一ですが、学校教育相談との大きな違いは、保護者に対するアプローチが一番に行われることであり、現場にはない着眼点により児童生徒の手助けを行えることでした。このような折、教職大学院への入学のお誘いをいただき、この双方のアプローチの違いを構造化させることによ

って、各学校教育相談担当者と連携しながら、児童生徒に関する問題を解決する術を探ることはできないかと考えました。まだまだ、考えがまとまらないところもあり、手探りではありますが、協働という視点で少しずつ進めていければと考えています。少しずつの前進が、児童生徒や先生方のお役に立ち、ひいては私自身のこれからの教師生活の糧となればと考えます。

まだまだ緊張の解けないまま、先日4月の合同カンファレンスに参加させていただきました。様々な年齢、校種の先生方と話を進めていく中で、緊張も少しずつ解けていきました。自分なりになぜ緊張が解けていったのか考えて見ました。時間の経過からくる安心だけではなく、先生方の話を聞いているうちに、自分の体験と共感、共

有でき、うなずける話題をたくさん聞けたことで自分を振り返ることができ、その安心から緊張が解けたのだろうと感じました。全く初めて会う先生方と今までの経験、考え方や悩みを共有できる場に参加でき、カンファレンス終了後に心地よさを味わうことができました。これからの新しいことへの挑戦、たくさんの先生方との出会いが楽しみになったカンファレンスでした。

不安ばかりのスタートですが、これから二年間、本当に自分にとって有意義な時間であるようにたくさんの方々の見識を学び、楽しく充実したものであったと後悔のない機会にしたいと考えています。大学の先生方をはじめ、多くの先生方にお世話になると思います。よろしくお願い致します。



西 繁寿 にし しげひさ (高志高等学校)

「一度やったことを覚えて再現することはできるけれど、はじめての問題になると思考がピタッと止まってしまうんです。」

20年ほど前に聞いた生徒の一言です。

学校祭、修学旅行、部活動、卒業式、・・・教員として22年間、若狭高校、武生高校、高志高校で勤務してきました。感動あふれる学校生活はどれも大切な思い出です。この間、数学の教員として、日々の教材研究や授業の準備はもちろん、同僚と指導法について話しをし、生徒の質問について意見交換を重ねてきました。個別指導にも多くの時間を割いてきました。様々な研究会に足を運び、本という本を読みあさりもしました。「よくわかった」「できるようになった」「数学が面白い」生徒のそのような声に励まされ、生徒の期待に応えていきたいと思い努力してきた毎日決して気楽なものではありませんでしたが、やりがいのある充実した時間でした。しかし、そんななかずっと頭から離れないのがあの「生徒の一言」です。

高志高校では、「予習型数学授業の実践」に挑戦しています。生徒の主体的・積極的な「本気の学び」を引き出すことを目指して「仮説検証型」「創造的思考型」の授業を展開していけば生徒の思考力は飛躍的に伸びるのではないかと考えました。いくつかの研究やこれまでの実践からも、この「予習型数学授業」は生徒の思考力を伸ばすのに極めて有効であるとの感触をもっていました。

この取り組みの支えとなっているのは、尊敬でき信頼できる同僚の存在です。昨年度は、週に1時間、時間割の中に「1年数学研修」の時間を設け1年の数学指導について意見交換を行いながらこの実践を進めてきました。これは、私にとってかけがえのないものでした。ここでは、各担当者が抱いた疑問や悩みをぶつけ合い、担当者それぞれの実践や考え方を共有し、これからの指導について話し合います。この時間を通して、確実に自分自身の視野が広がっていき、新しい取り組みにも思い切ってチャレンジができる、そして、同僚教員とともに教育活動にあたっているという一体感が日毎に増してくるものでした。

大学院の2年間では、尊敬でき信頼できる先生・同僚との多くの出会いがあるものと期待しています。2年間、

よろしくお願いします。



吉川 輝美 よしかわ てるみ （福井東特別支援学校）

はじめまして。今年度よりスクールリーダー養成コースに入学しました吉川輝美です。現在、病気や肢体不自由の障害のある子どもたちを対象とした福井県立福井東特別支援学校に勤務し4年目になります。新採用で知的障害対象の特別支援学校に赴任し、その後は、ろう学校で17年間の長い勤務期間を経て現在に至っています。

ではここで少し、本校の概要について紹介したいと思います。本校は、福井県立病院に隣接しており、建物の1～3階が学校で、4階には福井県特別支援教育センターがあります。センターと建物を共有していることもあり、情報交換や連携がしやすい環境にあります。また、施設設備が充実しており、全館冷暖房完備により、体温調節の難しい子どもたちも安心して過ごせる環境となっています。一度、見学にいらしてみませんか。

さて、私ですが、24年前に福井大学養護学校教員養成課程を卒業しました。熊谷高幸先生のもと、自閉症に関する研究をさせていただきました。久しぶりに大学院への入試や、手続き等で学舎内に入り、改修されて新し

くなった学舎を見て月日の流れを感じました。まさかまたここで学ぶことになるとは思ってもいなかったのですが、学舎を歩く一步一步が若き頃とは違い、何か使命感を背負っているような感じで身の引き締まる思いでした。校長先生から大学院の話聞いたときは、果たして、働き且つ、家庭のことをしながら2年間努めることができるのだろうかと不安でした。しかし、管理職の先生をはじめ、同僚の先生方から「バックアップするよ」という心強い励ましの言葉をもらい、これにチャレンジすることも私の使命なのかなと思い決心しました。とはいうものの本校に勤務して4年目でまだまだ分からないことばかり。研究の方向も定まらず迷う日々です。でも、これから始まる新たな学びが、今後の教員生活の指針になるよう、研鑽を積みたいと思っています。しんどくなって音を上げそうになることもあるのではないかと思います。そのときは、我が子が受験に向かうときに口にしていた沖縄の島言葉『なんくるないさー（挫けずに正しい道を歩むべく努力すれば、いつか良い日が来る）』を思い出して頑張りたいと思います。どんな2年間になるのかと不安はつきませんが、充実した時間にしたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



小野 拓士 おの たくひと （カリタス小学校）

スクールリーダー養成講座の小野拓士です。川崎市にあるカトリック系の私立カリタス小学校に勤務しています。カトリックの学校ということで、敷居の高さを感じる方もいるかもしれませんが、そんな

ことは全くありません。自分自身、カトリック信者でもなく、カトリックと関わることもなく、ちょっとした関わりといえばクリスマスのケーキとプレゼントだけを楽しみに育ってきました。しかし、縁があつてカリタスで働き始め17年目になりますが、日々のお祈りの時間や宗教の授業も敷居の高さを感じるものではありませんでした。また、外部からの指導講師（福井大学の松木

先生には 20 年近くご指導いただいています) を招いた授業研究や、公開研究会なども行っており、自分たちだけの研究にならないように「教えていただく」という伝統があります。皆様も、ぜひご来校下さい。

さて、高学年の担任をずっとしてきましたが、昨年度、久しぶりに一年生の担任となりました。学校の近くには多摩川が流れており、子どもたちと共に、年間を通して多摩川探検に出かけました。多摩川へ子どもたちをつれて行ったときに、多摩川を川と石と草しかないつまらない場所と感じるのか。それとも、好奇心をくすぐる虫や魚がいる、不思議な発見がある、遊びを創りだすたのしさがあると感じるのかでは大きな違いがあると思います。そこで、自由に思いっきり遊べる子どもたちになってほしいと願い連れて行っています。どんなことにも、興味や関心を持ち関わっていかうとすることが、学びの基本であると考えています。

また、クラスで羊も飼いました。子どもたちは散歩をさせたいのに、なかなか小屋から出ようとはせず、出た

としても、押しても、引いても思うように動いてくれない羊でした。しかし、毎日のように関わっているうちに、子どもたちとお散歩だけではなく、一緒に遊ぶようになったのです。少なくとも、子どもたちはそう考えています。二年生になった先日は、子どもたちの大好きな多摩川へも一緒に行くことができました。動物を飼うことで優しい気持ちを育てるだけではなく、この子どもたちのように、自分たちががんばったら、羊がお散歩するようになった(変わった)という気持ちも育てたいと思います。

自分たちが動いたら、周りが動いた。自分たちが変わったら、周りが変わった。そのような経験の積み重ねを総合学習や教科学習の中で培いたいと考えています。それが生きる力の 1 つであると思います。

2 年間、福井へ通えることに感謝し、皆様と共に学べることを楽しみにしています。よろしくお願いします。



堀 紘 ほり ひろし (至民中学校)

今年度よりスクールリーダー養成コースで学ぶ機会をいただき、本当に感謝しております。至民中学校での様々な協働実践を通して、もっと教師として成長し、生徒や地域から信頼されるためにはどうすれば良いのか悩んでいた頃、数々の優秀な諸先輩方から教職大学院での学びの価値を教わりました。正直いろいろな不安もありました。日頃の仕事だけでもかなり大変なのに、教職大学院での学びを両立することができるのか、自分の実践を教授の方々や他の院生さんに理解し認めてもらえるのか、などなどいろいろと考えました。

しかし今は挑戦して良かったと思っています。4 月の合同カンファレンスに参加させていただいた際、何とも言えない充実感や安心感に包まれました。そして一気に

不安はなくなり、むしろ今後の活動や多くの人との出逢いが楽しみになりました。自分の話に真剣に耳を傾けてもらえる喜び、他の実践者の自分とは違った視点で教育について考え悩んでいる姿、教授の的確なアドバイスなど、すべてが刺激的で自分を勇気づけてくれるものでした。これが、教職大学院での学びの価値であり、今後実践をしていく上で大切なものであると感じた瞬間でした。

まだまだ、学ぶべきことが多く、知識や経験も少ない自分ではありますが、できるだけ多く人との関わりを持ち、研究会やカンファレンスに参加していく中で、自分を高め、長期実践研究につなげていきたいと思っています。

「今後の複雑で多様な社会に生きる子供達にとって大切な社会力とは具体的に何なのか。そして、それを身に付けさせるために必要な教師力と具体的取組は何なのか。」

「スクールリーダーとして学校をより良くしていくために、今後どのような教師力を身につけていかなければならないのか。」

曖昧ではありますが、このようなテーマのもと、少しでも諸先輩方に追いつけるよう、子供たちの成長につな



藤本 純子 ふじもと じゅんこ (嶺南教育事務所)

今年度、教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました藤本純子です。中学校7年間、小学校10年間の勤務を経て、現在、嶺

南教育事務所研修課に所属しております。研修課の主な業務は、教職員の資質や指導力の向上を図る研修講座の企画運営、各学校への訪問研修、教育課題の解決に向けた調査・研究、教育図書・資料等の情報提供と利用促進です。小・中学校に勤務しているときは、担任をしている児童・生徒の困り感に寄りそい、どの子にも学びの場がある空間を構築すべく、毎日の授業に一生懸命だったように思います。今振り返ると、担任している学級のこと、自分の校務分掌のことにしか目を向けていなかったのかもしれない。現在の業務は、直接児童・生徒に関わることはありませんが、日々忙しい学校現場の先生方を側面から支援することによって、間接的に児童・生徒の成長を促すものだと考えています。教育現場における今日的課題に対応し、学校現場の要望に応えられるような研修を企画運営していくことが、現在の私の課題です。本年度実施する実践型集合研修で申込数が最も多かったのは、国語科です。学校現場の先生方は国語科が言語活動の核となることを理解しながらも、国語科の授業に

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
げていけるよう、教職大学院での学びを活かしていきたいと思います。そしていつか尊敬される先輩になり、学校を運営していく立場にもなった時のためにも、これからの2年間をしっかりとした意味のあるものにしていきたいと思います。2年間よろしくお願いいたします。

おける言語活動に苦戦しておられるのではないかと推測できました。言語活動の核となる国語科でどのような取組ができるのか、さらに他の教科領域で言語活動をどのように生かしていくとよいか、その手がかりが見つかる研修講座にしたいです。

先日、教職大学院の合同カンファレンスに初めて参加させていただきました。この中で、互いの現状や問題点を伝え合い、検討し合うクロス・セッションを行い、さまざまな地域や立場の先生方と交流させていただくことができました。県外から福井県に来ておられる先生方とも、お話をさせていただきました。これまでの経験と重ね合わせ、自分自身の取組を振り返るよい機会となりました。そして、経験や職種を越えて学び合えることに感動しました。また、研修を企画運営する上でのヒントもたくさんいただいたと思っています。

このように教職大学院で学ぶ機会をいただいたことは、私にとって大変幸運なことだと思っています。私自身が「学び続ける教師」となるべく、この教職大学院という学びの場を大切に、自己の研鑽に努めるとともに、学んだことを嶺南教育事務所研修課での業務に生かしていきたいです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします



大黒 康弘 おおぐろ やすひろ （丸岡南中学校）

今年度4月に福井大学
院教職大学院スクール
リーダー養成コースに
入学させていただきました
大黒康弘です。現在、
坂井市立丸岡南中学校に勤務しており、4年目になり
ます。教師生活も今年で17年目に入りました。

新採用校は美浜町美浜中学校で、5年間、多くの先
輩方から教科指導や生徒指導など本当に数多くのこ
とを教えていただきました。3年目から担任をさせて
いただきましたが、ちょっとした生徒の日常の様子や
うれしかった出来事などを週2～3回ペースで学級通
信に綴り、それを生徒に伝えることで、生き生きと表
情や活動が日ごとに多く見られるようになり、毎日の
生徒の成長が楽しみだったのを覚えています。美浜中
学校で教職員と力を合わせた経験や子どもたちとの
出会いが私の教師としての原点となっています。

次に赴任した坂井市立春江中学校では、生徒会や生
徒指導の校務を中心に行ってきましたが、大規模校で
あるために改めて先生方と連携、連絡・相談すること
の大切さを学びました。まさにこれこそが「協働」で
あり、チームを作ってよく話し合い、対応を考えて実
行することが、より良い方向に導くことを実感した6
年間でした。

その後、現場を離れ、福井県教育研究所教科研修課
研究員として2年間勤務し、主に教科「技術」に関す
る研究や研修講座の企画・運営を中心に行ってしまし
た。ちょうど平成24年度からの新学習指導要領が告
示されたときでもあったので、研究協力校で調査・実
践・省察を行いながら、新しく新設された内容を深め
ることができ、その研究成果を福井大学ラウンドテー
ブルで発表することができました。

その後再び現場に戻り、丸岡南中学校勤務となり4
年目を迎えています。本校は、平成18年4月に県下
初の教科センター方式を取り入れた学校で、今年は開
校10周年を迎える節目の年になります。9月12日(土)
にはPTAの多大な協力の下、10周年記念事業も予定
されており、改めて地域の方々に温かく支えられてい
る学校だと感じています。本校の今年度から3年間の
研究主題は、『学び合う学校文化の創造～「やりたい」
を喚起する方法の工夫～』です。校舎が斬新でオープ
ンな空間である事に加え、異学年による縦割り集団で
あるスクエア制による生徒会運営や、生徒の主体性を
尊重した生徒指導の考え方など、素晴らしい学校文化
を築いています。また地域連携の面でも、夏休みにP
TAの方々が中心になって夕涼み会を開いたり、文化
祭の日には保護者の方が食品バザーを行ったりと素
晴らしい学校文化があります。それだけでなく、2年
生で実施している「職場体験学習」や全部活対象の「1
部活1ボランティア」は、キャリア教育として地域と
連携をとりながらの教育実践であり、私にキャリア教
育の視点をより与えてくれています。また今年度から
は2年生で新たに「赤ちゃん抱っこ体験」も予定され
ており、これらの活動を通して生徒の豊かな心をはぐ
くむことができるものと確信しています。

今回、私は教職大学院で学ばせていただく機会を生
かし、多くの方々からアドバイスや刺激をいただきな
がら、本校の学校文化となっている地域と連携する行
事や教育実践のあり方について深めていきたいと考
えています。今後2年間、教職大学院で学んだことを
丸岡中学校での教育活動に還元し、より質の高いもの
にしていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

インターンシップ／週間カンファレンス報告

教職専門性開発コース 2 年／至民中学校

高田 侑来

「来年度の木曜カンファレンスは、少しやり方を変えようと思います。新 M2 が企画運営していき、私達教員がそれをサポートしていくという新しい形に挑戦しましょう。」

これは今年 2 月、私たちの代がいよいよ先輩になるという事実を実感し始めたまさにその時、柳澤先生から投げかけられた言葉である。正直に言おう。私達は狼狽した。一体全体、何を変える（何が変わる）と言うのだろう。そしてなぜ私達の代からなのか。考えたところで何も分からず自信はないが、ただ今まで経験したことのない「何か」が動きだそうとしていた。

今月、私はこの思いがけないサプライズからスタートした「新」木曜カンファレンス（以下木カン）の紹介をしたいと思う。そもそも木カンとは何なのか。従来のシステムも紹介しながら、私達が今年度新たに『挑戦』していることをこの場を借りて報告させていただきたいと思う。ただし、この取組はまだまだ改善の余地があること、言い換えれば発展途上であるということを何卒ご理解いただきたい。

まず木カンとは何か。これは毎週木曜日にストレートの院生（以下 SM）が大学に集まり、カンファレンスを行うことである。午前の部と午後の部があるが、いずれも日々のインターンシップで経験したこと・考えたことを共有し、意味づけ価値づけていくという有意義な時間である。もう少し詳しく説明すると、午前の内容は「今週の学びの振り返り」（主にインターンシップであったことの報告）・「主担当企画」（月毎にテーマを決め、それについて SM 全員で考えていく）の 2 つで、企画運営共に院生が行っている。そして午後は「授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究」・「公教育改

革の課題に基づくプロジェクト学習」という内容で、主に先生方の提案に基づき私達がそれについて調べ学びを深めていくというスタイルである。

それでは今年度に入り、木カンのどこが変わったのか。それは午後の部である。実は昨年度、この午後の部は私達にとって難易度が高いものだった。院生が能動的に考え行動できる午前の部に対し、午後の部は答申等を読む時間が多く、意見を交わす機会も少なかった。そのため「知らなければいけないことは承知だが、午後は学んでいるという実感がもてない…」これが SM（少なくとも私）の正直な気持ちだったと思う。そういった現状を踏まえ、今年からは私達 M2 と柳澤先生を始めとする午後にはいらっしゃる先生が、共にカリキュラムを組んでいこうということになった。これが 1 つ目の『挑戦』である。

始動したのは 3 月の下旬。昨年度のものを参考にしながら年間計画を立て、更に半年の計画を詳しく決めていった。先生方の思い、そして我々 8 名の M2 が昨年度経験したことを織り交ぜながら話し合いを重ねた。もちろん私達だけではなく、新しく入ってくる M1 のことも考えながら計画を立てるのは困難であったが、その都度先生方がアドバイスして下さり、また私達の提案を寛容に受け入れてくださったおかげでなんとか形になった。

そして 2 つ目の『挑戦』は、午後の部の司会進行を M2 で行うこと。昨年度までは主に柳澤先生が内容の趣旨説明をし、その後各々の活動に入っていた。しかし今年度は M2 全員がやること・目的・その手段を理解していたので、運営の全てを託されたのだった。ここで私達は初めて「午後の部がある理由、学ぶ理由」を言葉にし、それを説明する難しさを実感する。私達は昨年 1 年間の経験がある分、答えのない問いに挑むこと、そして挑ん

だ結果自分は何を思ったかというのを考えることに慣れている。しかし何も知らない M1 に学ぶ目的を伝えることは極めて困難だった。自分達の思いやテーマの主旨を、端的に伝えるにはどうしたら良いか。これが私達の目下の課題になりつつある。

上に挙げたように、計画を立てそれを実行するというサイクルがあるということは、当然振り返る時間も必要だ。これが 3 つ目の『挑戦』である。木カンが終わった後のおよそ 1 時間、M2 と先生方が一緒にその日の振り返りをする。通称 M2 会議である。各グループどのような話し合いがなされたかを 1 分程度で報告した後、次週、更には翌月の予定までも綿密に立てていく。もちろん年間計画に基づき行うが、進捗状況を把握し臨機応変に対応するように努めていく。私が今一番やりがいを感じている『挑戦』がこれだ。8 名の M2 が自分の得意分野を

生かし、会議を運営している。だれが名乗り出る訳でなくファシリテーターをやり、書記をやる。意見を求められなくとも、言いたいことを言える雰囲気話し合いが進み、回を経るごとにそのレベルが向上していると感じる。これから先、どうなっていくか分からないが、今後も続けていきたいと思う。

以上が今年度、私達 M2 が木カンにおいて向き合い挑んでいる『挑戦』である。まだまだ至らぬ部分が多く、特に M1 には不安を抱かせているかもしれない。四苦八苦している私たちの様子を見守る先生方も気が気ではないだろう。しかしまっすぐについてきてくれ意見も言ってくれる M1、なにより私たちを信用してサポートして下さる大学院の先生に感謝しながら、私達はこれから一年、新たな木曜カンファレンスを作り続けていきたい。

教職専門性開発コース 1 年／福井大学教育地域科学部附属小学校

池田 丈明

小学校でのインターンが始まって約 1 ヶ月、本当に色々なことを学ばせてもらった。教室に入るのは、実に約 7 年前の教育実習以来であった。ここ約 6 年間はテレビ番組の制作に従事していたせい、このインターンシップ初日の感想は、この一言。「自分はなんて使えない新人 AD なんだろう」。職員室の会話はまるで聞き取れず、また置いてあるモノの位置や名前も分からない。何にも分からないので、何をしなければいけないか分からない。まるで外界の惑星に紛れ込んだ異邦人のような感覚に陥ってしまった。「自分は無力！」という想いを抱き、初日が終わった。

しかし 2 日目に始業式が始まり、クラス分けが行われ、初めて児童と会うと、全く違う感情が沸き起こって来た。「この子たちの 1 年間でいかに充実したものにするか！それは自分次第だ！」という、今まで自分のことしか鑑みていなかったことがウソのような気持ちである。そして改めて第一歩を踏み出したことに心から感謝し

た。またメンターの宮本泰成先生は大変懐の大きな方で、「ガンガン生徒と仲良くなって、このクラスを乗っ取るような気持ちで来てほしい」と非力な私に言ってくれた。一人の教師として見て頂いたことが戸惑いながらも最高に嬉しく思った。以降 2 週間ほどは、授業は真剣に参観させてもらい、休み時間は子どもと遊ぶことに徹する日々を送らせてもらっている。子どもと共に学び、子どもと一緒に遊ぶことで、近くにいる大人という存在でありたいと考えていたからだ。

しかし 3 週間目、ある出来事が起きた。休み時間、男子数人対私でいつものように戦いごっこをしていた。するといきなり後ろから強めの膝蹴りとパンチをもらった。あまりの痛さに思わず少し本気で「本当に痛いからやめて！」と A に言った。しかし本人はどこ吹く風の様子であった。チャイムが鳴り、授業に戻り、今度は給食でたまたま A と同じ班で昼食をとることになった。そこで他の生徒がいつものように私を「日本人じゃない

みたい」「歳取ってるね」など言って来たので受け流している、Aが「チビデブツルピカハゲ野郎」と言って来た。なので私は、「人の外見を陥れるようなことは言わないでほしい」と伝え、「うるせー！デブハゲウソコ！」と言ってその往復が3回以上続いた。そして4回目、遂にこの時が来てしまった。私は「キレ」た。ちょっとドスをきかせて本気で「調子にのるなよ！」的なことを言ってしまった。するとAはビックリし挙動不審な目の動きで「ふーん」といって、それから私と喋らなくなった。怒りを抑えて給食を食べていると、近くの子どもから「先生怒るんだね」「怒ると怖いんだね」と言われた。このことを機に今までの自分を振り返ることにした。これまで怒らなかったことで、子どもたちは私を試していたのかもしれないと感じた。しかしこの怒ったことが良かったのか悪かったのか答えが出ない。そしてモヤモヤしたまま次の日を迎えた。Aに何と声を掛けようか迷いながら教室に入ると、Aが自分から話しかけてきた。Aは照れくさそうに、なんでもない昨晚のテレビの話をしてきた。休み時間も私に暴力的なことはしなくなった。そこで私はその日一日、Aを観察してみた。するとあることが分かって来た。勉強に非常に熱心に取り組む、また休み時間も同級生同士だとハメを外すこともない。つまり遊びをこれまであまりせず、人の気持ちや痛みが理解出来ない環境において、「さじ加減」の具

合が分からなかったのかもしれない。塾通いで忙しく、友達と喧嘩したり遊んだりしたことが無く、他人の意思を汲み取る機会が無かったのではない。しかし教室での、また班での立ち位置が不安定なため、敢えて私を貶めることで自分の存在証明をおこなったのではない。そう仮定すると、もっと本人との話も必要だったし、一方的に班員が囲む席で怒るのはまずかったかもしれない、という思いに至った。このモヤモヤを次の日の週間カンファレンスで先輩や先生に打ち明けた。すると「怒らず叱ることを念頭に入れた方が良い」「注意するときは『真顔指導』が良い」「あくまで先生の保身ではなく、生徒のためと思わせることが大切」「観察をちゃんとしたのは正しい」など多くのアドバイスを頂き、見事モヤモヤが「学びの宝石」に姿を変えた。週間カンファレンスはいわば「駆け込み寺」なのかもしれない。

上記の経験から、私の立ち位置を鮮明に確認することができた。週3回学校の中で、教職員としてのあり方や学校の総体を学ぶことができる場＝インターンシップ。そこでの悩みや葛藤、自分の不確かな方向性、それら全てを打ち明けることで、自らの学びにすることができる場＝週間カンファレンス。私はこの2つの居場所を持つことに常に感謝し、まだ見ぬ収穫を求め、また明日からのインターンシップに臨む所存である。

◆ 教育改革の展開を踏まえ、長期的な実践の展望をひらく

April

合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース2年／勝山高等学校

吉川 長利

いよいよ教職大学院での2年目の学びがはじまった。昨年度何かと頼りになった先輩方が去り、相談できる人がいなくなってしまったという不安はあるものの、今度自分たちがM2であることの自覚を持たなくてはと

思い、最初のカンファレンスに臨んだ。最初に今年度他県から福井県に派遣されている先生方の紹介があった。今年度も例年以上に様々な県から福井県に派遣されている先生方がいらっしゃるようで、こうした先生方から

は我々にとっても良い刺激を受けることになると思う。また、新たに教職大学院に入学した M1 の先生方も加わり、会場のコラボレーションホールは一種の華やいた雰囲気を感じさせる場となっていた。これから一年、この場所でどんな新たな出会いがあるのかと思いをめぐらせ、とても新鮮な気持ちで午前のグループ協議の時間を過ごした。

午後から行われた教育改革に関する文書の検討の時間では、資料として No21「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体改革について」を選択した。昨年度（2014 年度）から文部科学省がスーパーグローバル大学を新たに創設し、全国で 37 大学を指定するなど、大学入試が今後大きく変わることが伝えられている。そして 12 月には中教審が 2020 年に大学入試センター試験を廃止し、それに変わる新しい試験を導入することを答申している。大学入試が変わらないと、高校教育だけを変えようとしても意味が無いという議論は、これまでも再三交わされてきたものであり、この機会に答申をじっくり読んでみようと思ったことが理由だ。答申では、現行の大学入試が「従来型の学力」に基づいて、あらかじめ設定された正答に関する知識の再生を一点刻みに問うものであり、「確かな学力」に対応したものになっていないとの問題点を指摘している。今後の高校での教育

の方向性を考える上では、この先予定されている制度の変更を十分に踏まえる必要があると感じた。

2 日目は長期実践研究報告 (No188 佐々木徳之「繋ぐ」) を読んだ。昨年度から英語教育強化地域拠点事業で中学校の先生方との関わりが増え、中学校の職場の様子にも関心が向くようになった。中学校での授業研究会に参加すると、英語科以外の他教科の先生方からも活発な発言があり、高校との違いを不思議に感じていたのだ。話は先生が異動により灯明寺中学校に赴任し、それまでに経験したことのない指導の困難な生徒たちに直面する場面から始まる。冒頭部はずっと緊迫した状態の日々が綴られている。そして、先生は教職大学院の門を叩き、そこから先生の新たな学びが始まる。そこから先生が一年目に教職大学院を通じて経験されたことは自分の経験と重なる部分の多いものだった。特に夏季集中でコミュニティ・オブ・プラクティスを読んで、校内の研究部会との共通点を発見し、コア・グループを固めようと思い立つ筋は、まるで同じだと感じた。読み進めると、長期実践研究報告書は教職大学院 2 年目の内容へと進んでいく。研究主任の立場で研究推進委員会を立ち上げ、その中で他の教員との摩擦に苦しみながら学校改革を目指して奮闘する様子が書かれているのだが、その中で先生自身の立ち位置が推進役からコーディネータへ徐々に変化していく様子が伺えた。果たして自分の教職大学院 2 年目は、どのような経過をたどるのだろうか。

4 月合同カンファレンスに参加して

スクールリーダー養成コース 2 年／春江小学校

山田 俊行

4 月の合同カンファレンスに参加した。1 年前は、何をどう話していいかわからず、汗だくになった覚えがある。しかし今年は、多少余裕をもって参加できた。

1 日目の「教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」では、平成 26 年 10 月 21 日に出された中教審答申「道徳に係る教育課程の改善等について」

を読んだ。平成 25 年 12 月 26 日に道徳教育の充実に関する懇談会から出された「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）」が、どのように変化したのか、今後の学習指導要領にどのように反映されるのかを知りたいと思ったからである。昨年度、本校では道徳教育を研究してきた。内容的には「今後の道徳教

育の改善・充実方策について（報告）」をもとにしたため、方向性や実践内容を省察したいという思いもあった。

大幅な変更点としては、4つの視点の順序を入れ替えること、内容項目ごとにその内容を端的に表すキーワードを明示することが挙げられる。

指導方法については、多様性、柔軟性がキーワードとなろう。授業1単位時間で複数の内容項目を関連付けた指導を行うことや、一つの内容項目を複数の時間で扱うような指導も認められている。また、道徳的習慣や道徳的行為に関する具体的な動作や所作の在り方に関する学習などの指導（スキルトレーニング）なども重要視されている。指導計画については、1年間・6年間という長期にわたった計画的・発展的なもの、より実質的なものが求められている。

懇談会報告から約1年間での大きな変化がなかったことから、昨年度の実践の方向性がまちがっていなかったことを確認できた。

2日目の「長期実践研究報告を読む」では、昨年度教職大学院を卒業された栃川正樹先生の研究報告『学び合う「実践コミュニティ」をコーディネートするCST・研究主任・授業者としての経験を通じて』（No.228）を読んだ。

ここでは、各種実践コミュニティの中で「コーディネーターとして実践コミュニティに所属したい」と思うようになり、リーダーとして活動する中で、リーダーとはどうあるべきか、リーダーとしてどう行動すべきかに気付き、「そこにどんな学び合いが生まれるのか」「学びあえる場をどう作っていったらよいのか」という問いに対する答えを得るまでの実践が書かれている。

実践コミュニティに学び合いを生み出すためには、リーダー像をコーディネーターと捉え、コミュニティ全体をサイドから支えるような形がよいとのことである。コーディネーターとして、このようなスタンスを貫かれていたからこそ、実践上の様々な困難を克服することができ、それぞれのコミュニティの中に協働体制が構築できたのであろう。

そして実践の過程で、その活動を支持してくれる仲間や、評価してくれる仲間、その評価をさらに広げてくれる管理職の存在など、活動の幅を広げてくれている人たちの存在が書かれていた。努力する人の周りには、必ず理解者や協力者が存在する。その人達をコアとして実践コミュニティが展開され、活動が続ける中で多くの実践コミュニティとつながり、より広がりを見せることが分かった。

また、「コーディネーターの傍らには必ず思考リーダーの存在がある。コーディネーターと思考リーダーが共に学びを共有するからこそ、実践コミュニティが充実した学びを得られ、発展していく。コーディネーターが思考リーダーの両方を兼ねなければいけないコミュニティはうまくいかない。」という文章も印象に残った。昨年度の実践を振り返る中で、私と研究主任との役割分担の結果が成功につながったことを思い出した。主たる道徳の実践部分を私が担当し、その他全体を研究主任がやってくれた。お互いの役割の中で、コーディネーターと思考リーダーを交代しながら実践していたのである。もちろん、自分では気づいていなかった。大学院の宮下先生に、「核になる人が協働していることがいいですね。」と言われて初めて気がついた。合同カンファレンスのセッションの中でも、研究主任をされている先生の苦労話を聞くことがある。自分一人で抱え込まないことが成功への近道かも知れない。誰かと対話し、相談することで学びが生まれ、協働が生まれるのではないかと気づかされた。

今年度、教務主任という立場になり、直接的に研究部会に口を出しにくくなったが、コミュニティを全体的な立場で捉え、（栃川先生流に言うならば）サイドから支えることができるような気がしている。また、研究主任と道徳主任と私という3人での協働体制で学校全体をコーディネートできればと考えている。

4月のこの時期は、学校現場は大忙しである。スクールリーダーとして活躍している先生方にとっては、様々な計画や企画文書の作成、クラスづくりと寝る間を惜しんでの生活が続く時期である。正直なところ、この時期の土曜日曜の二日間を失うのは苦しい。しかし、こういう時期だからこそ、大学院で先行実践を読

んだり、話し合ったりすることが重要な気もする。煩雑さの中で「例年通り」となりがちな計画から一旦目を外すことで、これから始まる一年の諸計画を吟味す

ることができるからである。現状を再度把握し直して、一年の戦略を立てようと考えた二日間であった。

学びの種

教職専門性開発コース 2 年／丸岡南中学校

北川優佳

いよいよ今年度もスタートをきった。4 月下旬、M1 にとっては初めての、M2 にとっては久々の合同カンファレンス（以下、合カン）が行われた。合カンでは、ストレーターの院生・スクールリーダーの院生・大学教員が一堂に会し、協働で学び合う。今回は年度初めということもあり、「3 つの種—実践的な自己紹介—」、「教育改革の展開を吟味し、学校での実践を捉え直す」、「長期実践研究報告を読む」、「自分の実践を紹介する」の豪華 4 本柱で二日間にわたって学びを深めた。

4 月の合カンは刺激的な言葉から始まった。「振幅の幅は大きく。しかし、振り切れてしまわぬように。」「『お前は総理大臣にはなれないが、総理大臣を育てることはできる。』『子どもへの関わり方が変わると子どもが変わる。子どもが変わると社会が変わる。私たちは社会に働きかけているのよ。』」これはオリエンテーションで宮下先生と小林真由美先生がおっしゃった言葉の断片である。改めて、教師は覚悟と責任を持ち、教育者というよりもむしろ学び人となり、挑戦・向上の心を持って自己と・他者と向き合わなければならないと強く感じた。他にも、合カンは魅力的な言葉で溢れていた。ここでいくつか紹介させて頂く。「(国境を越えて) 歩いて、(直接) 人と関わって信頼関係を築く。」「すべてを物語る

1 シーンを写真に（おさめたい）！」「目の前にいる児童・生徒に全力で！」「外部の人が良いと思うところこそ大事に。」「絶対にやってはいけないのはスルー。何でもいい、できることをする。」...これらはほんの一部に過ぎない。そして、この言葉たちの背景を割愛した今、私以外の誰かに私が感じた高揚感が伝わるかは分からない。しかし、校種・教科・地域に関わらず、多種多様な経験の中から紡がれた多くの言葉が私の心には突き刺さった。もしかすると、発言者は何の気なしに発したのかもしれない。そして、きっと発言者の意図を・想いを完全に他者が理解することはできないだろう。しかし、異質な他者との関わり、それもお互いに自己開示しながら語り・傾聴し合うことで未知なる化学反応が起きる可能性が高まる。

他者を鏡とした学び合いがここにある。ここには学びの種が撒き散らされている。それに気づくか否かは参加者次第、気づけた種を育てるも枯らすも実践者次第。教職大学院にはカンファレンスやラウンドテーブルといった学びの場がたくさんある。モラトリアム最後の一年、この恵まれた環境に感謝し、謙虚に、しかし食欲にこの場をフルに活かして学びを深めていきたい。

教職専門性開発コース 1 年／丸岡南中学校

山田 晃大

合同カンファレンスとは、月に一度、院生や教職関係者が一堂に会すことで、各自の実践を見つめ合い、学び合うための教職大学院のイベントである。私にとって初めての参加であった 4 月の合同カンファレンスでも、一言では語れない沢山の学びが生まれた。今回はそこでの様子を少しだけ、時系列にそって解説しつつ、その場でどのような学びが生まれたのかについて紹介していきたい。

年度初めの合同カンファレンスは、二日にかけて行われる。初日の初めには、これからの活動についてのオリエンテーションが行われた。そこで紹介された「3 つの種」のお話は、我々のその後の活動の道標となった。「自分の中の種に気付いたら、その種をどんな土地にまくのか、どのようにその成長を待つのか、そして育った実や花をどのようにいただくのか、が重要である。」というお話である。初日一回目のグループ活動では、普段お会いすることのできない異校種・異業種の方々とお話することができた。私のグループには保養小接続関係のお仕事をされている方から、中学校の現場で研究主任をされている方、他県の小学校教諭の方までいらっしやり、広い視野での話が展開された。そして話は自然と、福井型 18 年教育のことにまで動いていった。先生方の教育に対する熱い思いを知り、私もその一員として働きたいと、心から思った。グループメンバー一人一人の思いを確認し合った後は、様々な資料を読み合うことで、現場での実践をとらえなおす。その前に、その活動の意味について教職大学院の先生からお話があった。おかげで、知識基盤社会の現代において教師は何をしていくべきなのか、思いを巡らせながら読み合わせに参加することができた。その場で私は『言語活動の充実に関する指導事例集』などを読み、その内容や感想を発表した。それについて同じグループの先生方からは、言語活動をいかに授業に取り入れていくのか、生徒が生き生きと発言できる環境にするにはどうしたらよいのかなどに

ついでの実践的な意見をいただくことができ、非常に勉強になった。

初日のグループワークのあとから二日目の午前にかけての間は、大学院の先輩方一人一人が残して下さった長期実践研究報告書の中から、各自が気になるものを読み、今後の実践について考える時間にあてられた。私は、過去に丸岡南中学校でインターンシップをしていた先輩の報告書を読むことにした。報告書には、先輩の実践内容が詳しく書かれており、まるで私が、その実践の様子を参観したかのような体験をすることができた。二日目の午後には、各自が呼んだ報告書について初日とは別のグループで報告し合った。その場でお聞きした、学校改革についてのお話は非常に興味深いものであった。「改革を進めていくのには少しずつ現状を変えていくしかなく、それには長い時間がかかる。しかしながら、ひとたびやり方を間違えてしまうと、積み上げていたものが一瞬で崩れてしまう。」というお話であった。このお話は生徒指導においても同じだなと思った。子供たちの成長にも長い時間がかかる。それを支えていくことが教師の役割であり、成果を求めすぎてしまえば、生徒は離れていってしまうだろう。その流れで、「支えるとは、成長を待つことだ。」という意見も出た。言われてみればそのとおりである。良いフレーズをいただくことができたと思った。その後は各専門分野に分かれ、各々の実践を報告し合うグループワークを行った。数学の授業研究についての生の意見を聞くことができて、今後の実践の参考にさせていただくことができた。

今回の合同カンファレンスで私は、日ごろの実践を振り返り、見直すことができた。ここでの学びを肥やしにして、将来大きな花を咲かせることができるよう、日々の実践に取り組もうと思う。

実践し

実践研究福井ラウンドテーブル

省察する

2015 summer sessions

コミュニティ

2015.6.26-28

6/26 Fri.

Presession

6/27 Sat.

Zone A 学校

これまで Zone A では「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマとしてセッションを積み重ねてきました。昨年度 6 月は“教師のやりがい”をサブテーマに設定し、教員組織において子どもたちの豊かな学びにつながるビジョンを共有することの重要性を再認識しました。しかしそれを現実のものとしていくためには、立場や世代、考え方など教員の間にある様々な違いを越えたビジョンの共有がいかんにして可能なかということについて考えていく必要があります。そこで、昨年度 2 月のラウンドテーブルでは、「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」というサブテーマを設定し、子どもたちの豊かな学びを支えるための協働する組織づくりや学校全体のコミュニティの活性化について改めて考えることにしました。このセッションを通して私たちが気付かされたのは、子ども個人に着目すること、日常的に語り合うこと、皆で共にあることといったシンプルな原則でした。

「アクティブ・ラーニング」というスローガンがかつてないほど人々の教育にかかわる言説に現出していく一方で、もしかすると私たちは、言葉の響きにとらわれて日常の現実には潜む無数の可能性を見落としやすくなっているのかもしれない。そうであれば、個別の教育現場で展開されている具体的実践に耳を傾け、自らのあり方と照らし合わせ、そしてその気づきを人々と共有していくことが、これまで以上に必要になってきていると言えるのではないのでしょうか。

そこで私たちは、今回のラウンドテーブルにおいても前回のサブテーマを継続しつつ、改めて「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」を個々の学校の現実に根ざして考えること、そしてそれを参会者の皆様と共有することを通して、子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティの可能性について、より検討を深めていければと思っています。

オリエンテーション 12:40-12:50

Session I ポスターセッション 12:50-13:50

福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援学校から、子どものこと、授業のことを語り合える組織につながる学校づくりの実践についてポスター報告が行われます。ポスター報告にもとづき、各学校及び参会者で互いの実践を交流します。

Session II シンポジウム 14:00-15:50

「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」について、そのプロセスをシンポジストに報告いただき、コメ

ンテーターを通して、参加者の皆様とともに、実践の意義について考えていきます。

〈シンポジスト〉 梶川 正樹（福井市豊小学校 教諭）
高嶋 和代（福井市安居中学校 教諭）
鮫島 京一（奈良女子大学附属中等教育学校 教諭）

〈コメンテーター〉 千々布 敏弥（国立教育政策研究所教育研究情報センター 総括研究官）

〈コーディネーター〉 森田 史生（福井大学教育地域科学部附属中学校 教諭）

Session III フォーラム 16:00-17:20

Session I と II を受け、参加者で小グループをつくり、それぞれの立場や背景を基盤として「子どものこと、授業のことを語り合える組織づくり」について議論し、実践を共有していきます。すべての参加者の皆様が日々、感じていることや悩んでいることについて、本音を交えてじっくりと語れる場にしたいと考えております。

Zone B 教師教育

Zone B では、生涯にわたる教師の職能成長を支える教師教育という視点から、前回に引き続き「21 世紀の教師教育をイノベーションする」をテーマとし、「チーム学校」を支える教師教育と、教師教育の中核を担う学校・行政・教職大学院の連携の在り方を探っていく。

現在、中教審において、「これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について」（平成 26 年 7 月 29 日諮問）の審議がなされている。「チーム学校」は、学校組織全体が一つのチームとして力を発揮していくことであるが、教員と教員以外の者がそれぞれの専門性を連携して発揮することが欠かせない。チームの一人一人が、「各自の専門性を発揮すること」はもちろん、「他者との連携」を実現する力量を養うことも求められている。

一方、政府の教育再生実行会議の「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」（平成 27 年 5 月 14 日第 7 次提言）においては、「国や地方公共団体、大学等が協働して、教員がキャリアステージに応じて標準的に習得することが求められる能力の明確化を図る育成指標」や「教師の育成指標に基づく研修指針等」を策定するとされている。

このように、一人一人の教師が、主体的、協働的で能動的な学びを展開できる資質・能力を身に付けるために、教員養成・採用・研修の全ての段階において、教職大学院の果たす役割は今後ますます拡大していく。

そこで、今回の Zone B では、「チーム学校」を実現するために、チームの一人一人が専門職としての資質・能力を伸ばしていけるようにする評価の在り方と、それに呼応する学校・行政・教職大学院の役割について、これまでの成果を踏まえて参加者の皆様方と共に以下のセッションを進める。

オリエンテーション 12:40-12:50

Session I ポスターセッション 12:50-13:50

教師教育に関する実践をポスター報告いただき、参加者の皆様方と共に実践を交流します

Session II シンポジウム 14:00-15:20

『「チーム学校」を支える教師教育～教職大学院の成果を問う～』

〈シンポジスト〉 茂里 毅 （文部科学省初等中等教育局教職員課長）
柳澤 好治 （文部科学省高等教育局視学官
（命）大学振興課教員養成企画室長）
牛渡 淳 （仙台白百合女子大学長／日本教育経営学会会長）

津田 由起枝（元福井市立安居中学校長）

〈司 会〉 松木 健一（福井大学教職大学院・教授）

SessionIII フォーラム 15:30 - 17:40

先の2つの session を受け、小グループに分かれて参会者の皆様方と議論を進めます

Zone C コミュニティ 学び合うコミュニティを培う

この間 ZoneC ではコミュニティの発展における「持続性」の問題を共有し検討しています。現在私たちが地域や職場で出会う課題は、ある一つの方法や、個人的・個別的な取り組みでは必ずしも解決し得ないより複雑なものへと変化し続けています。地域の発展を支える自治や学習においても、その持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われていると言えます。それは、コミュニティの持続的な発展に向け世代をこえてつながり学び合うことをどのように支えていくことができるのかという課題への挑戦でもあります。

ZoneC は、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、JR 福井駅東口前の AOSSA が会場です。地域・世代・領域を超え互いの実践の展開を捉え直し、＜人や組織をつないでいくこと＞、＜世代のサイクル・新しい実践の担い手＞、＜コーディネーターの力量形成＞といった視点から上記の問いを深めていきます。

Session I はポスターセッションです。AOSSA のフロアをまたぐ空間的な広がりの中にポスターを配置し、それを通じて互いの実践を交流します。Session II のシンポジウムは「持続可能なコミュニティをコーディネートするー多文化共生社会を支える聴くこと・省みることー」と題し、コミュニティの持続的な発展と専門的力量形成を支える傾聴と省察の意義を考えていきます。前回と前々回では「語り・聴く」関係性の中で活動が編まれ、実践がつながり、コミュニティがひらかれていく可能性が確認されました。今回はこれまでの議論を踏まえ、地域のコーディネーターが多文化共生という新たな課題の担い手である実践者達の取り組みを傾聴し共に省察することでコミュニティが編まれていく可能性に注目します。SessionIII のフォーラムでは、シンポジウムでの問題提起を受けながら6人程度の小グループを組み、地域・世代をこえて互いの活動を交流・共有していくクロスセッションを進めます。

多くの皆様のご参加・ご来場を心よりお待ちしております。

オリエンテーション 12:40-12:50 AOSSA6 階（参加受付ブースあり）**Session I ポスターセッション 12:50-13:50 AOSSA4 階アトリウム・5 階展示スペース**

「世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートする」

福井市・越前市・池田町・勝山市他の公民館・福井大学探求ネットワーク・福井市教育委員会生涯学習室・福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」他

Session II 主旨説明・シンポジウム 14:00-15:20 AOSSA6 階レクリエーションルーム

「持続可能なコミュニティをコーディネートするー多文化共生社会を支える＜聴くこと・省みること＞」

〈シンポジスト〉 辻端 聡子（ふくい市民国際交流協会）
神吉 宇一（長崎外国語大学）

〈司 会〉 半原 芳子（福井大学） 田中 志敬（福井大学）

SessionIII フォーラム 15:30-17:40 AOSSA6 階レクリエーションルーム

Zone D 授業

ZoneD では、これまで授業にまつわる様々な問いを語り合い聴き合いながら授業改革の扉を開いてきた。子どもの目線から授業を体感し、授業者としていかに冒険できるかを問い直し、授業を駆動する問いはどのように生まれるのかへと問い進め、質の高い学びを生む問いとはどのようなものかを問うに至った。今年春のラウンドテーブルでは、原点をまっすぐに見つめ、「私たちは授業の積み重ね（授業s）の末に何を残したいと願うのか」を聴き合い、語り合う中で、生徒が主体的に学びあうために必要な「解放」と、子どもたちが夢中になって学びあう「教室文化」の創造が授業改革の扉を開く鍵の一つであることを共有できた。しかし、学生から投げかけられた「どうしたらこういう授業ができるのでしょうか？」という問いが残された。今回は、「どうしたらできるの？～アクティブラーニングを考える～」というテーマで語り合いながら学生の問いについて参加者の皆さんと、質の高い授業作りのためのアクティブラーニングについて考えてみたい。

オリエンテーション 12:40-12:50

Session I ポスターセッション 12:50-13:50

Session II シンポジウム 14:00-15:20

「学び合う教室文化」を創る校内研修の在り方（仮）

〈シンポジスト〉 本橋 和久（牛久市立ひたちの牛久小学校 教頭）

〈ファシリテーター〉 小林 和雄（福井大学）

Session III フォーラム 15:30-17:40

「協働探究型の授業」で生徒はどう変容していくのか（仮）

〈シンポジスト〉 永廣 裕子（福井市至民中学校 教諭）

〈ファシリテーター〉 富永 良史（福井大学）

6/28 Sun. 8:30-14:00

小グループで実践の展開を聴き合います

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふり返る中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

参加申し込みの方法は、福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご覧ください。あわせて、6月22日のラウンドテーブルの実践報告者を募集しています。ご希望される方は入力フォームからお申し込みください。

平成27年度 福井大学教員免許状更新講習について

平成21年4月に始まった教員免許更新制において、教育職員免許法第9条の3に基づき開設された教員免許状更新講習が今年度で7年目を迎える。教員養成系学部を有する大学には、この制度の目的である最新の知識技能の修得の場としてのミッションを果たすことに関して、大きな期待が寄せられている。

本学においても、受講者の先生方に満足いただけるよう、毎年いずれの分野・領域においても、創意工夫に富んだ講座を積極的に開設してきている。特に、必修領域（教育実践と教育改革I）を担当する教職大学院では、「新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ—実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る—」をキーコンセプトに、専門職として探究し合う新しい方法を採用入れた講習を実施しており、プログラムの特色としては次の点を強調している。

教職大学院の教師教育のノウハウを活かして、「実践・省察」を重視した講習にしていること

少人数による話し合いを基本とし、そのグループ編成は校種、年齢、地域、教科等の枠組みを解いたものにしたものになっていること

必修領域 12 時間に、選択である「教育実践と教育改革Ⅱ」6 時間を加えて、連続 3 日間の計 18 時間で一括りとする講習を提供していること

1日目は、受講者が作成した自らの教育実践をまとめたレポートの報告から始まる。実践の経験を交流し課題意識を共有するために、グループのメンバーで語り合い・聴き合いを行うためである。その後、グループ内で、多くの優れた実践事例資料を読み深め、展開の筋道をたどる活動に取り組む。2日目は、1つの実践事例を取り上げて考察したことを各自レポートにまとめ、その後、新たなメンバーで構成されるクロスセッションの中で報告会を行う。3日目は、教師としての自分の歩みを振り返り今後の展望を拓く目的で、自身の教育実践レポートの作成に取り組み、その後、クロスセッションを通して省察を深めるという流れになっている。

レポート作成や報告に必要な時間の確保、比較的新しい優れた実践事例資料の収集、ファシリテーションのスキル向上等、解決すべき課題は少なくない。しかしながら、事後評価アンケートから垣間見える受講者のニーズや要望に沿うべく、絶えず改善を重ねてきたつもりである。今後とも、一層充実した講習にするため、細心の注意を払いながら丁寧な運営を心がけていきたいと考えている。

講習の詳細については、以下のとおりである。

対象の職種

教諭および養護教諭

講習名

教育実践と教育改革Ⅰ（教育の最新事情）・・・必修講習部分（2日間）
教育実践と教育改革Ⅱ（教育実践の省察と展望）・・・選択講習部分（1日間）

日程・会場

※3日間とも9:00～16:20 各回とも上段が必修講習部分で下段が選択講習部分

- ①平成27年 7月22日（水）～ 7月23日（木）
平成27年 7月24日（金） 3日間とも福井県自治会館
- ②平成27年 7月29日（水）～ 7月30日（木）
平成27年 7月31日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス
- ③平成27年 8月5日（水）～ 8月6日（木）
平成27年 8月7日（金） 3日間とも福井県立大学小浜キャンパス
- ④平成27年 8月19日（水）～ 8月20日（木）
平成27年 8月21日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス
- ⑤平成27年12月23日（水）～ 12月24日（木）
平成27年12月25日（金） 3日間とも福井大学文京キャンパス

（二宮 秀夫）

学びをつなぐ《探究するコミュニティ》(3年次)
—「個の学びの推進力を高める協働探究をデザインする」—

The Challenge for Distributed Communities of Practice and Reflection 25

◆◆ 研究紀要・実践報告書の紹介 ◆◆

「伝え合う ひびき合う(福井大学教育地域科学部 附属幼稚園研究紀要 20～22 号)」

～実践記録を読む／書くことの意味を探る～

福井大学教育地域科学部附属幼稚園の研究紀要 20～22 号は、研究テーマ「伝え合う ひびき合う」のもと、「遊びの中で友だちとかかわる姿を見つめて」「協同して遊ぶ姿を求めて」「遊びの中の学びをつなぐ」といったサブテーマに焦点をあて、子どもたちが遊びの中でさまざまな伝え合い響き合い、その中で学びの芽生えを育んでいく過程が描かれている。具体的には、3・4・5 歳それぞれにおいて、4～5 月、6～7 月、9～10 月、11～12 月、1～3 月の 5 期に分けて、その時期の子どもたちの遊びの展開とそこでの学びがいくつかのエピソードを元に示されている。それにより 1 年を通して子どもがどう育っていくのか、さらには 3 年間でどう育っていくのか、具体的に考えることができるものになっている。

たとえば、21 号の 3 歳児「不安から安心へ（4～6 月）」の事例は、入園したばかりの 3 歳児が、教師と一緒に遊びだし、自分のしたい遊びを見つけ、友だちの存在に気づいて幼稚園生活に馴染んでいく過程が描かれている。4 月、砂場の端に座り込む男児に先生は電車のおもちゃを渡す。電車を走り出す動きに先生が「ガチャン、ガチャン」と声を乗せ、一緒に電車を走らせ「三国駅です」「海駅です」と一緒に動き出す。そんな一対一の丁寧な関わりの方で、クラスでのお集まりではみんなで座るラグマットの外に座っていた男児が、5 月には床の白いビニールテープで囲った枠と一緒に入りはじめ、色グループの場所に座るようになっていく。遊びの場面でも踊りの輪の中に笑顔で入ったり、自分から色水をやりたがって先生に手伝ってもらい、出来た物をみんなに見せたりしていく。6 月の終わりには、みんなと一緒にお面とマントをつけて新聞の剣を持って「なかまだ」と忍者ごっこを楽し

んでいた。
園に来る

のが不安で怖がってさえいた子どもが、自分のやりたいことを見つけ、実現していこうとする、そして友だちと場を共有して仲間意識を持って一緒に活動していく姿には、小さな学びの芽生えや協同の芽生えが見られる。その背景には、先生が子どもと関係を丁寧に紡いでいきながら、クラスでみんなが一緒になる場をつくり、同時にやりたいことが実現できるよう物や場を用意し、喜びを共有していく機会をつくっていることが大きい。この子どもたちが、どうやって 3 年間ここで育っていくのだろう・・・と次の事例を読みたくなくなっていった。

さて、このような、子どもの姿をエピソードによって描き、そこでの教師の働きかけや環境を考察していく研究紀要にはどのような意味があるだろうか。よくある誤解を 2 つ挙げて考えてみたい。一つは「子どものことばかり書かれていて教師の指導が分かりにくい」というものである。おそらくそれは自分の実践に使えるノウハウを求めているからである。しかし万能なノウハウなどない。子どもがどのような展開で活動し学び育っていったのかというプロセス抜きには教師の指導は語れないはずである。逆に子どもの具体的な学びの展開を記述することなく一方的な教師の指導方法だけが書かれているのでは、教師が何をやったのかは分かっても、子どもが実際にどう学んだのかが分からない。読み手は、実際に保育や授業の場面を見て子どもの姿をつかんでいるように、実践記録においてもありありと描かれている子どもたちの活動のプロセスを追いかけてつかみ、それが実現されたのはど



のようなデザインや働きかけがあったのか、考えながら読み進めることでこそ意味があるといえる。

もう一つは「うまくいったところやできる子だけしか描いていないのではないか」というものである。これは完全に紀要の意味を誤解している。紀要の実践記録は、すべての子どもの学びの過程を網羅的に記述するのが目的ではない。もちろん、教師はクラスの子どもたちすべての学びの過程を活動中の発言や書かれたもの等で把握しており、そこにはうまくできた子もつまづいた子もいて、そういう子どもたちの活動の記録を見て反省しながら次の保育や授業に生かしているに違いない。そこでその記録はあくまでも教師が子どもを評価し自分の保育や授業をよりよくするための記録である。翻って研究紀要に示された記録は、保育者・授業者である教師が、今子どもたちに求められている力や園・学校として子どもたちに育もうとしている力をどう捉え、何をめざし、どう実現しうるのか、その可能性の一つを示しているのではないだろうか。そのためには、やはり教師の側から指導方法だけを記述したり、活動の全体を大まかに記述したりするのではなく、保育や授業の中で子どもがどのように学び育ったのかを極めて具体的に記述していく必要がある。記録に登場する子どもは限られていても、その子は確かに学んだり育ったりしており、それは能力の高い子を取り上げているからではないだろう。どんなに能力の高い子どもでも、授業や学級の中にそれを発揮する場がなければ学びや育ちの姿が見えてくることはない。その意味で、登場する子どもが少数でも、実践記録を丁寧に読めば、一人一人が力を発揮し学びや育ちの姿が見えるような場がつくられていることが読み取れるはずであり、その子を通して学級の子どもが垣間見え、そこまでの学級の歴史や教師の協働が垣間見え、また向かっていく方向も見えてくるはずである。

逆に言えば、書き手にとっては、このような読みに堪えるものにしていくことが求められる。「書く」と

いう行為は「語る」行為とは大きく異なる。語りは、自分が語っているようでありながら、実はその場での聴き手との相互作用によって引き出される部分も多く、他者に助けられて実践を振り返ることが可能になっている。一方で、実践を書こうとすると、自分でそれをする必要がある。自分が何をめざし、子どもたちの活動をどう捉え、実践をどうデザインしてきたのか、自身に問いながら考えを吟味して言葉にしていくことが求められる。書き手は単に子どもたちが何をしていたかを羅列的に記述するのではなく、自身を問い直し、同時に活動の展開の構造を捉え直すことが必要となるのである。「語る」とときには感覚的な言葉でいわば誤魔化すことができて、「書く」となると捉え直しを突きつけられ徹底的な吟味を迫られる。その上で、読み手がその活動を追体験できるように、ありありと子どもの姿を描き出すことが求められる。だからこそ、書くことは辛い作業なのだが、より深いレベルの省察を可能にするといえる。

書かれたものは、時空を超えた協働探究にもつながっていく。その保育・授業に立ち会っていなかった人にも実践を開き、実践でめざしてきたもの、子どもの捉え、実践のデザイン等について共有し、互いにどう考えるか交流し、共に探究していくことを可能にする。他者の読みに触れたり他者の書いたものに触れたりする中で、書き手は再度自身の実践への構えや子どもの捉えを問い直すことにつながるに違いない。

保育・授業研究の場では、ビデオを使ってその日の場面を取り上げて検討することも多い。しかし実際には、その日までの歩みがあり、その日以降に展開していくものがあるはずである。1回の保育・授業だけでなく、ひとまとまりの遊びや単元あるいは「年」のスパンで、先に述べたような振り返りができるのは、実践記録でこそ可能なのではないだろうか。院生や拠点校の先生方にはぜひチャレンジしていただきたい。

(岸野麻衣)

福井市至民中学校 実践記録 2014

学びと生活の向上－規範・学力・有用感の向上を目指して－

福井市至民中学校(平成 27 年 3 月)

桜の表紙をひらく。1 ページ目冒頭にて鈴木三千弥研究主任はこう語る。「本校は、一昨年の移転開校 5 年目に大きな荒れを経験」したと。その書き出しに驚くが、さらにこう続く。「安全安心な学校づくり」を最優先課題と位置づけて抜本的な学校改革に取り組んできたが、「その道のりは平坦ではなく、我々教職員は苦悩の日々を過ごしてきた」のだと。そしてそのことは研究同人である教職員・院生の合計 300 ページを超える記録からリアルに伝わってくる。淵本幸嗣校長は言う。この実践記録は「教職員が力を合わせて取り組んだ『学校づくり』の記録」なのだと。

「はじめに」で淵本幸嗣校長の学校づくりへの想いと願い、「おわりに」で森上愛一郎教頭の感謝で結ばれる本実践記録には、教職員と院生による日々の丁寧で真剣な実践がおさめられている。「実践研究の概要」、「各研究部会の取組」、「学年の取組」、「学び合う教師集団による学校の活性化」、「教職大学院との協働研究」、「資料」の 6 つの内容から成る本実践記録には実に数多くの「人」が出てくる。実践記録を執筆している教職員・院生はもちろんであるが、約 300 ページの実践記録の中には、何百人いや何千人もの「人」があらわれるのである。それは子どもたちであり、保護者たちであり、地

域の方たちであり、そして同僚の先生・院生たちである。そして、その「人たちは関わり合い、「結び目」をつくっている。教室での子どもたち同士学び合い・助け合い・育ち合いをはじめ、子どもたちと先生・院生たち、子どもたちと保護者たち、子どもたちと地域の方たち、先生・院生たちと地域の方たち、そして先生・院生同士と、それはまるで一つのタペストリーを編むかのようなあたたかな結び目である。

本実践記録は、まさに学校・保護者・地域が共に連携・協働し学び合う「実践コミュニティ」づくりの記録である。持続可能な学校づくり、さらには地域づくり、社会づくりへの知恵と示唆が大いに詰まった至民中学校の本実践記録をぜひ手にとっていただきたい。

(半原芳子)



Schedule

6/26 Fri - 6/28 Sun 実践研究福井ラウンドテーブル 2015

7/4 Sat 合同カンファレンス (A 日程) 7/11 Sat 合同カンファレンス (B 日程)

【編集後記】

新緑がまぶしく爽やかな季節となりました。それぞれの場で新たな挑戦が始まっていることがニュースレターに寄せてくださったみなさんの原稿からうかがえ、編集者もエネルギーをもらいました。今号には実践研究福井ラウンドテーブルの最新情報を掲載しています。スタッフ一同楽しみに準備を進めております。

(半原芳子)

教職大学院 Newsletter **No.73**
2015.5.16 内報版発行
2015.6.05 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp